

記号論

定延 利之

「学会展望ではない、肩肘張らないものを」という趣旨に甘え、門外漢の身ではあるが、「記号論」に多少とも関連する平成23年の出版物で筆者の興味を惹いたものを思いつくまま挙げる。見落としや見当外れはお赦し頂きたい。

まず取り上げたいのはいわゆる figurative language に関する対照的な2点 [1][2] である。このうち [1] は日本語のメタファーの「原理」に肉薄した認知言語学的論考で、他方 [2] は文学作品(向田邦子『思い出トランプ』1980)における「技芸」を分析したメタファー論である。日常生活上の多くの言語活動がメタファーを含んでいるとする認知言語学では、個々の文学作品の技芸の巧拙については少なくとも現段階では十分論じられないので、メタファーに関して対照的な2面からの相補的な考察が相次いで世に出たことを喜びたい。

アイロニーの観察から始まった [3] は、インターネット(三省堂ホームページ)上で現在も進行中の連載で、機能主義的な立場からの興味深い言語観察が展開されている。ここ十数回は呪文という、ふだんあまり取り上げられない現象に光が当てられているので、それだけでも一読の価値はあるだろう。今後も何が出てくるか目が離せない、要注意の連載である。

記号研究の新領域を開拓したものとしては、括弧の意味を追求した [4] を外すことはできない。週刊誌の釣り広告に始

まり、デリダ、ペイトソン、そしてラムダ計算と、括弧の持つ思わぬ深みに引き込まれる。括弧に括るとはどういうことなのか、その行動は人間の言語・思考・コミュニケーションの基盤にどのように関わっているのか等々、考えさせられる。

その他に目立ったのが役割語やキャラクタに関する [5]-[8] である。これらの論考は「ことばの新しいハイブリッド」([7]) であれ「方言コスプレ」([8]) であれ、表面的にはいかに意図的に操作されているように見えようと、根本的なところでは意図が十分には及ばない「身体としてのことば」([6]) の姿を照らしだしていると筆者には思える。

以上の諸研究は、取り上げられている現象だけでなく、目的、手法においてもそれぞれに異なっているが、それらに取って大まかながら共通点を見出そうとするなら、状況そして身体と切り離された自律的な「記号」のあり方について再検討を迫るもの、ということになるだろうか。平成23年はこのような問題意識をもった優れた出版が続いたように思う。

[1] 鍋島弘治朗『日本語のメタファー』くろしお出版、[2] 半沢幹一『向田邦子の比喩トランプ』新典社、[3] 山口治彦『談話研究室へようこそ』(<http://dictionary.sanseido-publ.co.jp/wp/author/hiko/>)、[4] 木村大治『括弧の意味論』エヌティティ出版、[5] 金水敏(編)『役割語研究の展開』くろしお出版、[6] 定延利之『日本語社会のぞきキャラくりー顔つき・カラダつき・ことばつき』三省堂、[7] 三宅和子『日本人の対人関係把握と言語行動』ひつじ書房、[8] 田中ゆかり『方言コスプレの時代』岩波書店 (神戸大学)